
夏月と冬太の執筆風景

一之瀬六樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏月と冬太の執筆風景

【Nコード】

N9293Z

【作者名】

一之瀬六樹

【あらすじ】

文芸部に所属する男女の会話を通して小説の書き方について学ぶラブコメディ。毎日更新して年内に完結までもっていく予定ですが、更新ごとに再評価していただけると嬉しいです。

その1 『プロット』

「ふと、何か小説を書きたくなる夜があるんだ！」

夏月は机を叩いて僕にそう訴えた。

「書けばいいじゃないか」

そう答えてやるが、夏月は首を横に振る。

「でも書くネタがないんだよっ！」

「じゃあ別に書かなくてもいいんじゃない？ 意味がわからんぞおまえ」

「冬太なんぞには私の気持ちはわからんさ！ 趣味で書いているだけの冬太にはなっ！」

僕は書きたいものがあるときだけ書く。それ以外はこうして文芸部の部室で、コーヒーを飲みながら夏月と駄弁って過ごしていることが多い。

夏月は長い黒髪をかき乱して続ける。

「書きたくなるといっても、それは半ば義務……！ 一種の強迫観念みたいなものだ！ 私のようにプロの作家になることを目指して新人賞に作品を送っていながら長年選考途中で落とされまくっている者にとって、作品を書いているのに世の中に作品を発表しないという状況はなんか焦るんだよ！ 物書きとして自分は何もしていないような気分になっちゃってしまっただ！」

「だから、ふと小説を書いて発表したくなるってのか？」

「そのとおり！」

「でも発表なら年に数回も文芸部で部誌作って出してるだろ」

「あんなんじゃない全然足りないんだよ！ プロは日本全国に自分の小説を発表してるんだっ！ そもそも部誌なんて誰も読んでないじゃん！ 無理やり配ってもゴミ箱がとんでもないことになっちゃっしー！」

「じゃあ、ネットで発表でもしたら？ 全国どころか世界中に発信

できるぞ。おまえの小説」

「そりゃ発信はできるだろうさ！ インド人に日本語で書かれた小説は読めないだろうがな！」

「まあそりゃそうだけど」

なんで数ある国の中からインドが出てきたんだろ。

そんな些細な疑問はスルーして、夏月は額に手を当てながら嘆く。「それに長編小説は新人賞に送るから、基本的にネット上にアップロードすることはできないんだ。いや厳密にはできるしそうした作品が大賞を受賞した例もあるけどさ、一度でも外部に公開した作品は受け付けないというレベルもあるわけで、だったらできる限り公開しないままでいたいじゃないか！？」

両手を使って僕に同意を求める夏月。

「情けないくらいケチな考えだな。つうかそりゃおまえのワガママだろ？ 自分で公開しないことを選んでおいて、作品を何も公開してないから焦るだなんて言うなよ……」。ていうか新作書け。それで万事解決だ」

「それはムリ」

「なんでよ？」

「最初に言つたが、そもそも一本の長編小説を組み立てられるようなネタがない」

「話にならねえ……それで作家志望のつもりかおまえ？」

「い、いや、違うんだ！」

僕の批判を必死になつて否定する夏月。

「りよ、良質のプロット、物語の設計図を組み立てるのは並み大抵のことじゃない。場合によっては小説そのものを書くよりも時間がかかってしまうんだ」

「なんか言い訳くさいなあ……」。

「冬太。何か言ったか？」

「いえ何も」

「まあいい。話を続けるぞ。さっき私はネタ出しとプロットを

ごっちゃに話したが、この二つは厳密には別個の作業だったことを冬太は知ってるか？」

「ええと、ネタ出しは言い換えれば設定資料集を作る作業で、そうやってネタ出しをしてから、そのネタを活かせるように物語を組み立てるのがプロット……で、合ってるか？」

「そう。私だって、設定やアイデアの引き出しがまったくないわけじゃないんだゾ？ でも、言ってみればどれも短編向きの一発ネタだ。長編を一編書ききるには、そういうネタをいくつも組み合わせ、より大きな物語の流れをつくらなければならない。ネタや物語の取捨選択をして、本気で無駄のない構成の話を作るためには、プロットは絶対に必要だというのが私の持論だ。そうやって新人賞に送るためのプロット一つ作るのさえ苦労するのに、その場の思いつきでささっとネタを組み立てるなんてムリムリ。ネタがもったいないし」

「でも僕は、プロットなんか作ったことがないぞ？」

「それは冬太が短編やショート・ショートしか書いてないか、あるいは長編でも、最初から頭の中である程度のプロットができあがってるんだろ？」

「そういうもんかなあ……自覚はないんだけど」

プロットをがちり作るだけあって、たしかに夏月は物語のまとめ方が得意だ。伏線を上手くばらまいたりして、無駄なシーンが一切ない。

でも夏月の小説は、ちょっとカチコチに固まりすぎだ。

ラノベは芸術じゃなくてエンターテインメントなんだから、もうちょっと少しくらい、無駄なシーンがあってもいいんじゃないかと僕は思う。

「夏月も一回くらい、プロットを立てずに書いてみれば？」

「それはもうやった。すくなくとも私の場合、プロットの無いまま長編小説を書くのはかなりの博打だ。そういうことをするとまた、text形式の未完成の小説がnovelフォルダの中にいくつも並

んでしまうこと」

「さいですか」

「愁傷さま。」

「じゃあアレだ。ラブコメ。どこにでもありそうな可愛い女の子とアレコレするだけの話なら比較的楽に作れるんじゃないか？」

「冬太は甘いな。あまあまハニーのようだ」

「なんだそれ」

「特に意味はない　いや、実際に書こうとするとラブコメだつて決して馬鹿にできるものではないんだぞ？　ストーリーが単純なぶん、キャラやギャグに気を遣うはめになる。どこにでもあるラブコメを書くのであればそもそも書く意味がないから、何かしら際立った特徴を付けなきゃいけないんだ」

「難しいな。半分くらいおまえの泣きごとのように聞こえるけど」

「冬太はあんまり読者ウケとか考えないからな。こういうことはあんまり考えたことなかったんじゃないか？」

「そうかもな」

「私のように作家を目指している者は、新人賞に送るために小説を書く。だが小説を書き始めた頃は自分の書きたいものを書きたいように書いているものだ。かつては私もそうだった」

「いきなり自分語りか」

「う、うるさい……！　チラシの裏に書くだけじゃ寂しいだろ！」

「いやまあ、聞いてやるけどさ」

「じゃあ続ける……。まあつまり、自分の書きたいように書いているとだな。一部の天才を除いて、そういった小説は必ずと言っていいほど他人にとっては面白くないものとなるわけだよ。　そう、

そうればたとえば素人がカラオケで気ままに歌うのに似ている。ストレス発散や自己満足のために自分の声質や音程を気にすることなく歌うのだから本人は気持ちよく歌えるが、音楽という洗練された一つの芸術作品としては聞くに堪えないものになってしまう」

「それ、遠まわしに思うように書いてる僕の作品を馬鹿にしてるだ

る」

「馬鹿になどしてない！ 冬太の小説は私は好きだぞ？ どうしても心のどこかでウケ狙いになってしまう私の小説と違って、冬太の小説にはパワーがある。作品を読めば冬太が何を書きたかったのか伝わってくるよ」

「……褒めても何も出ませんが」

「まあまあ、照れるな冬太！」

「て、照れてねえよ！」

「そうか。実は私もあんまり褒めてない。冬太の小説って結局はくだらん自己満足になってることが多いからな」

「なんだそりゃ！ やっぱバカにしてるじゃねーか！」

喜んで損した……ッ！

「だから馬鹿にはしてないと言っているだろ。自己満足 結構なことじゃないか。厨二病ってラノベ書くには最大の武器だぞ？」

「もうやめてくれ……」

「私の作品は誰も読まない。でも冬太の作品には一部のファンがついている。厨二病のファンが」

「だからそこを強調するなよ！ わざとか！」

「いや、これは結構本気で褒めてる。いいよな、冬太にはちゃんとファンがいて。私の小説なんか、読者ウケを気にするせいで実は誰のウケも取れていないという無味乾燥なものになってしまっている。これでは誰得小説だ」

「……おまえの小説だって、楽しみにしている読者はいるよ」

「ふん。根拠のない慰めならいらないぞ？ そんなことしてもらわなくても、私はいつか作家になって」

「バカ。僕がその読者なんだよ」

その2 『キャラ』

ある日いつものように文芸部の部室でコーヒーを飲みながらマンガ雑誌のページをめくっていると、夏月がえらく不機嫌な様子でドアを開け閉めして入室してきた。

「おはようー!」

「……ああ、おはよ」

今は放課後で朝ではないのだが、部室で会うときはこの挨拶で定着している。

「おい冬太! なんか私に言うことがあるんじゃないか?」

「特に無いが、強いて言うなら髪型が変わってるな」

普段は黒髪をまつすぐに伸ばしている夏月だが、今日は頭の上でツーンと結んでいる。

「ほう。やはり気がついたか、さすが冬太だ。それで、この髪型の感想は?」

「結構似合ってるな。可愛いぞ」

「な……………っ!」

夏月の顔がみるみるうちに紅潮していく。

「な、なにを恥ずかしいこと言ってるんだこのバカ!」

「正直に答えただけでバカ呼ばわりはないだろ」

「だ、だからこれ以上私を辱めるなっば……………っ!」

「いつ僕がおまえを辱めたよ」

おそらく夏月は人から褒められることに慣れていないんだろう。

「ふ、ふんっ! 冬太が変なことをいうからいきなりトップギアに入ってしまったではないか!」

「はいはい。んで、面倒くさがり屋のおまえがわざわざ髪型を変えるなんて、どういう風の吹きまわしだ?」

「そうだ。それが本題だった。冬太のせいで赤面しつつ帰るところだった」

夏月は気を取り直して、座っている僕の目の前で腰を屈め、目線を僕に合わせてこう尋ねた。

「どうだい冬太？ 今の私はキャラが立っているかい？」

「は？」

「だから、他のキャラクターとカブっていやしないかと聞いている」「髪型が？」

「それも含めて全体的に」

「なんで急にそんなことを気にするんだ」

「よくぞ聞いてくれた」

夏月は姿勢を元に戻し、ふんぞり返って腕を組む。

「実はだな、昨日読んだライトノベルに出てきたヒロインのキャラが、私とカブっていたんだ」

「どんなところが？」

「ほぼ全部」

そんな馬鹿な……ドッペルゲンガーじゃあるまいし。

「私だつて驚いたぞ。黒髪ロングだけでなく高慢ちきな喋り方までそっくりだったんだ」

「自分が高慢ちきだつてことは自覚していたのか」

「いや、だつて私は作家志望だぞ？ 作家は夢を与える職業だ。その作家に自信が足らなくてどうする！ 冬太はなよなよした心配性のピーターパンと一緒に空を飛べる自信でもあるのか!？」

「空を飛ぶなら、心配性な技師が整備して慎重なパイロットの操縦する飛行機に乗った方がずっと安心できるだろ？」

「くっ……。そういう屁理屈を言っているから貴様は女の子にモテないんだ！」

「余計なお世話だと思つ」

「クソツ、話が進まん。とにかくだな、そのラノベに出てきたキャラクターと私はキャラがカブっているようなんだ。でも性格は今さら変えられないから、見た目を変えることにした。それでこの髪型だ。黒髪ツインテール」

「なんで小説内のキャラクターとのキャラかぶりを気にする必要があるんだよ」

「だって私は作家志望だぞ？ 作家は個性的な物語を生み出す職業だ。その作家に個性が足りなくてどうする！」

「その理屈はもういい」

「そういう冬太も主人公だからって無個性でいいわけじゃないんだぞ？ 最近の主人公はやたら熱血だったりやたら不幸体質だったりやたら右手が幻想をぶち殺したりするんだからなっ！」

「それ全部同じ作品の主人公だろ」

「だいたいな、こうやって部室の中で駄弁ってるだけの構成も新しくもなんともないんだぞ！ もっともあちらは生徒会室だがな！」

「おいおまえさつきからメタ発言の連発やめろ！」

「それだけじゃないぞ！ ラノベを書くことそのものを題材に扱ったラノベだって『ライトノベルの楽しい書き方』や『ラノベ部』ですでに出版されている！」

「だから言わなきゃわかんないようなことわざわざ言うな！」

「ふん……読者をナメるなよ冬太？ 彼らの中には私やおまえよりもよほど多くのラノベを読んでいる連中もいるんだぞ。こんなものは一目見ただけでパクリ小説として断罪の刑だ！」

夏月こそ、もっと読者のおおらかな心を信頼したらどうだろう。

「夏月。カブりを気にしてちゃ何にも書けなくなるぞ」

僕がそう言っていると、夏月は「うっ！」と胸を押さえる。

「……ま、まあな。一人の物書きとしては自分の才能を信じてそれがあるわけだ。一人の人間が何千人と言う小説家とまったくカブらない話をいくつも思いつくはずがない。あんまり斬新なものだと読者がついてこれなくて、冬太の自己満厨二病小説のようになってしまっし」

まだそのネタ引つ張るつもりなのかおまえ。

「いくら他人とまったくカブらない小説は無理でも、そのままパク

るのはやめるよ？ やっぱり作者のオリジナリティがあるから小説は面白いんだからさ」

「冬太つてたまに格好いいことを言うよな。さすが厨二」

「なんでおまえはひと言多いんだよっ！」

「……とにかく、これから私はツインテールでやっていくことにする。ふふ、これで私も萌えキャラの仲間入りだ！ 金髪ツインテールなら腐るほどいるが、黒髪ツインテールは新しいだろう！」

両手を天（部室の天井）に掲げる夏月。

「夏月 それなんだけどな」

「な、なんだ？」

「黒髪ツインテールは、『あずにゃん』みたいだって言われるぞ」

「な……！！ なんだとっ！？ じゃあツインテールを輪っかにしてイカリングみたいにすれば」

「それは某18禁のゲームに登場するキャラの代名詞だ。他にはピククの探偵も愛用していたっけ？ しかも、奇抜な髪形なぶんパクリ度が増してる……」

「八方ふさがりじゃないかっ！」

「まあ僕は、どんな髪型してる夏月も好きだけどな」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9293z/>

夏月と冬太の執筆風景

2011年12月29日03時46分発行